

## 本書の編集経過と構成について

小林 茂

終戦前後の参謀本部と陸地測量部、さらに地理調査所に関する渡辺正氏所蔵資料は多岐にわたる。またそれが作製された当時は非常時であり、現在では容易に想像できないような事態が発生していた。したがってそうした状況に関する知識なしには、十分な理解は容易ではない。また場合によっては、資料のもつ意義について思わぬ誤解が発生する可能性も懸念された。

このような点から、資料の発刊に際しては、まず各方面の専門家からなる編集会議を開催し、そこでの討論をもとに参加者各自がそれぞれの分野から調査・研究をすすめる、さらにそれをもちよって理解をふかめ、これをもとにしっかりと解説を付すことが関係者のあいだで構想された。それにむけて、最初の会合が東京都杉並区上荻の渡辺氏宅で開催されたのは二〇〇四年一月二五日のことであった。参加者は渡辺氏のほか、高木・金窪・田中・小林の五名で、終戦前後の参謀本部に関する渡辺氏のお話をお聞きしたほか、資料を拝見し、作業の方針について協議した。なお、この時点までに資料のかなりの部分が高木・金窪氏によってコンピュータに入力されており、これを初期から参照できたことは作業を急速に進めることを可能にした。

第二回会合は、二〇〇四年五月一六日にお茶の水のホテル聚楽で開催し、参加者は渡辺氏のほか、高木・金窪・田中・長岡・久武・小林の七名であった。参謀本部での情報将校としての立場にくわえ、主として地

理学者による研究会（「兵要地理調査研究会」）の運営、陸地測量部から組まれたばかりの地理調査所への米軍将校の訪問（口絵の図3を参照）などに関する渡辺氏の話がうかがった。また、資料集の体裁（B5判縦書き）や目次案、解説の分担を協議した。

第三回会合は、二〇〇四年八月七日にやはりお茶の水のホテル聚楽で開催し、出席者は渡辺氏のほか、高木・金窪・田中・源・長岡・久武・小林の八名であった。渡辺氏の戦後の活動などについてお聞きしたあと、所蔵資料の目録をもとに、その作製された経過などについて渡辺氏の回想をうかがった。また本書に掲載する資料について協議し、これを決定した。

第四回会合は、二〇〇四年十一月二十八日に神田の学士会館で開催し、前回同様八名が出席した。すでに提出されていた高木・金窪両氏からの原稿にくわえて、小林による「はしがき」の原稿を検討するとともに、その他については執筆予定の原稿の目次について協議した。

このような協議やうちあわせをへて、二〇〇五年一月から徐々に原稿の編集を開始し、同二月には、未提出であった田中・久武両氏の原稿をのぞき、初校を全員に発送して訂正をくわえた。また同三月初旬になって、全部の原稿がそろい、さらに校正をかさねることとなった。

以上のように準備された本書は、「Ⅰ 解説編」、「Ⅱ 資料編」、「Ⅲ 附録」と大きく三つの部分にわかれる。「Ⅰ 解説編」冒頭の久武『兵要地理調査研究会』については、渡辺氏所蔵資料のうち、とくに第二次世界大戦末期におこなわれた、本土防衛に関する研究会の解説に焦点をあてている。地理学者と軍あるいは戦争との関係について、欧米の例も

ひろく参照しつつ検討し、上記研究会の位置づけを試み、地理学史の論考となっている。

つぎの金窪「陸地測量部から地理調査所へ」は、陸地測量部の沿革からはじめて、一九四五年の長野県への疎開、終戦、その陸軍から内務省への移管と順を追って解説し、さらに現在の国土地理院に至る発展過程も視野におさめている。とくに終戦当時大本営参謀であった渡辺氏の構想や行動を中心に記述する。なお、終戦前後の陸地測量部については、塚田建次郎・富澤章両氏による「終戦前後の陸地測量部」(外邦図研究会編『外報図研究ニューズレター』3号、二〇〇五年刊)があることを付記する。

つづく田中「史実調査部と地図の行方」は、終戦後の旧日本軍関係資料の行方を追跡する。陸軍省・海軍省に設置された史実調査部の調査活動、GHQの指令、さらにWDC(ワシントン文書センター)の資料接収を検討しながら、そこにおける地図の位置に焦点をあてている。渡辺氏所蔵資料は、この方面のプロセスを示す重要文書として位置づけられた。田中宏巳「敗戦にともなう地図資料の行方」(外邦図研究会編『外報図研究ニューズレター』3号、二〇〇五年刊)もあわせて参照されたい。

さらに源「兵要地誌関係資料」では、この方面の渡辺氏所蔵資料を他の文献と比較対照して異同をあきらかにし、その位置づけを試みている。従来参照してきた文献にくわえ、靖国神社偕行文庫に寄贈された渡辺氏旧蔵資料との比較もおこない、その性格にせまっている。

末尾の長岡「渡辺氏所蔵地図 解説と目録」では、現在渡辺氏が所蔵されている地図の目録を示し、そのなかでとくに注目される地図を解説

する。かつては多くの地図を所蔵されていたとのであるが、これらはその片鱗と考えることができる。

以上に対し、「II 資料編」は渡辺氏所蔵資料を中心とする。冒頭の金窪「総説 兵要地理資料集録(渡邊正氏資料)について」では、その構成と特色を簡潔に記述する。つづく高木「兵要地理資料集録(渡邊正氏資料)解説」では、資料を分類整理し、一点一点について日付やサイズ、形式とともに内容を解説する。これについては口絵写真(長岡による)の図5-11と比較対照していただきたい。

以上は、つづく資料の本体である「兵要地理資料集録(高木・金窪両氏の命名)とともに高木・金窪両氏による、渡辺氏所蔵資料の研究の成果であることを強調しておきたい。旧軍人の高木氏は戦後自衛隊に籍を置かれ、金窪氏は少年時代に陸軍幼年学校に学ばれて、旧日本軍についてくわしい知識を持ち、渡辺氏所蔵資料の学術的価値をはやくから理解し、整理分類に着手された。

なお、「III 附録」では一九九五年十二月に信濃毎日新聞に連載された終戦前後の渡辺氏の活動に関する連載記事を掲載している。これについて許可をあたえてくださった同新聞社に感謝したい。なお、この記事に関連して、中野尊正「外報図と私とのかかわり」(外邦図研究会編『外報図研究ニューズレター』2号、二〇〇四年刊)ならびに上記、塚田建次郎・富澤章「終戦前後の陸地測量部」も参照していただきたい。